SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

リメディアル英語教育における履修者の学習行動の分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野, 修一, 髙瀬, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010028

調査・実践報告

リメディアル英語教育における履修者の学習行動の分析

天野 修一（静岡大学 大学教育センター）
髙瀬 祐子（静岡大学 大学教育センター）

1. 序論

本報告は静岡大学のリメディアル英語科目「基礎英語演習」における履修学生の学習行動をまとめ，分析，考察するものである。静岡大学では 2013 年度新入学生より教養英語科目における大幅なカリキュラム改革を実施した[1]。新カリキュラムでは，新たにリメディアル科目として基礎英語演習を設置し，必修単位修得のサイクルに組み込んだ。リメディアル科目の設計に関しては，髙瀬・松野・小町・小早川（2016）に詳しいが，本報告の内容理解にも必要と思われる基本的情報について以下に整理する。

基礎英語演習の対象者となるのは 1 学年前学期に全員が履修する英語演習 I の単位を修得できなかった学生である。英語演習 I は成績評価の一部に TOEIC のスコアを組み込み[2], 学期末試験として TOEIC IP テストを実施する。前学期中に実施される TOEIC テストにおいて 400 点未満の学生は不可となり単位は修得できない。つまり，出席回数不良等で不可になった学生を除けば 1 学年前学期に TOEIC で 400 点以上を取得できなかった学生がリメディアル科目の対象者となり, 1 学年後学期以降の各学期に設置される基礎英語演習を履修することになる。基礎英語演習は必修科目であるため，英語演習 I の単位を修得できなかった学生は卒業までに必ず基礎英語演習の単位を修得することが求められる。このように明確な基準でリメディアル科目対象者を特定し，必修科目の一環としてリメディアル科目の受講を義務付けることにより，学習支援を必要とする学生が適切にリメディアル科目を受講し，標準的な学習経路への復帰を目指すことができる仕組みを設計した。

週に 2 コマの基礎英語演習では，目標を基本的文法事項の定着と語彙力の強化と定め，半期で授業とそれに対応する授業内試験の組み合わせを全 10 回実施している。履修学生の多くは高校卒業時までに習得するべき文法事項が十分に定着しておらず，語彙力も低い学生である。したがって，基礎となる文法事項の復習を行い，語彙力を強化することにより，基礎的な英語力の向上が期待される。

実際の授業では, 文法事項の定着に重点を置き, 教科書は主教材として *Basic Grammar in Use*（Cambridge University Press）を，副教材として『速読英単語必修編』（Z 会）を使用した。まず主教材に沿って教員が文法事項の説明を行い，その後学生は練習問題を解き，答え合わせを通して再度重要な文法事項や注意点を確認する。この流れをくり返し行い，学生の様子を見ながら練習問題の問題数や解く時間等を調整した。また，机間巡視を行い，学生の理解が不十分であると感じた箇所や単元については補足説明を行い，次回の授業でもう一度確認することを心がけた。授業の予習は求めず，授業を実施した同じ週または翌週に実施される授業内試験に向けて各自で復習を行うという仕組みである。この仕組みを通して，学生が「自ら学ぶ」習慣を身に付けることをめざした。基礎英語演習では単位取得の条件として授業開講期間中に 1 回以上 TOEIC を受験することを義務付けているが，授業内試験と対応する授業では試験の範囲を扱うため，TOEIC 対策用の教材は使わず，TOEIC 対策も実施しなかった。しかし，授業内試験との対応がない授業では，TOEIC の練習問題を行う時間を設け，希望者に参加させた。

基礎英語演習では 1 週間に 90 分のコマを 2 コマ確保し，1 コマで授業，もう 1 コマで授業内試験を実

施した。授業内試験の内容は授業の内容に準拠しており，使用する教材に沿った問題を中心に出題した。そのため，基本的な文法事項や語彙力を計る試験となっている。試験時間は 50 分を目安とし，100 点満点の試験を 10 回実施した。10 回の授業内試験の合計点で 60%以上取得した学生は TOEIC のスコアに関係なく単位を修得できるシステムである。単位を修得するための条件を以下に示す。

1. TOEIC で 400 点以上を取得する，または平常点 60%以上を取得しなければならない。
2. 学期中に一度も TOEIC の受験がない場合には不可とする。
3. 平常点は学期中に実施される 10 回の授業内試験の合計点に基づき計算される。
4. 授業内試験を 4 回以上欠席した場合，平常点は「0 点」となる。

最終的な成績は平常点と TOEIC スコアの組み合わせにより決定される。評価の基準は以下の表 1 の通りである。TOEIC で 400 点以上取得した場合は，平常点，つまり授業内試験の合計点に関係なく単位を修得することが可能である。英語演習 I を出席回数不良で不可になった学生の中には英語の能力の高い学生も含まれるため，このような運営上の規則を作り，学生がレベルの合わない基礎的な授業や試験を義務的に受けなければいけないという事態が発生することを防いでいる。

表 1 基礎英語演習における成績評価基準

	TOEIC スコア				
平常点	500 点以上	450 点以上	400 点以上	400 点未満	未受験
90%以上	秀	優	優	良	不可
80%以上	秀	優	優	良	不可
70%以上	秀	優	良	良	不可
60%以上	秀	良	良	可	不可
60%未満	優	可	可	不可	不可

基礎英語演習の成績評価は，TOEIC のスコアと授業で実施される 10 回の授業内試験のスコアに基づき決定されるため，各担当教員が独自に設定した評価基準の説明不足や教員間での隔たりによって学生が不公平に感じることはない。また，卒業に関わる単位であるため，今後基礎英語演習の単位が修得できなかった学生が担当教員に直接単位の修得を求めて訴えるという事態が起こる可能性もあるが，成績評価の基準が開示され明確に示されているため，個人的な訴えによって基準が揺らぐこともない。担当教員は学生からの不毛な訴えを，わかりやすい評価基準の開示によって防ぎ，また退けることができる。このような基礎英語演習の基本設計を踏まえた上で，履修学生の学習行動の調査および分析を行うことが本報告の主な目的である。次章では，2014 年度後学期の分析結果から報告する [3]。

2. 2014 年度

2.1 所属学部別の履修者数

表 2 は静岡および浜松の両キャンパスにおける所属学部別の履修登録者数を示したものである。2014 年度の静岡キャンパスの履修登録者数は 151 名，浜松キャンパスは 94 名，両キャンパス合計 245 名であ

った。学部別に見ると，教育学部と工学部の学生がそれぞれ 75 名，80 名と多く，この 2 学部で全体の 6 割以上を占める。また学年別にみると，当然ながら 1 年生の受講者が大半を占めており，静岡キャンパスの 151 名のうち 88.74%にあたる 134 名，浜松キャンパス 94 名のうち 79.79%にあたる 75 名が 1 年生であった。2014 年度の新入生は，静岡キャンパスでは 1208 名，浜松キャンパスでは 761 名であったため [4]，両キャンパスともにおよそ 1 割程度の新入生が 1 年次後期の基礎英語演習を履修したことがわかる。

表 2 両キャンパスにおける所属学部別の履修者数（2014 年度）

年度	2014 年度																							
キャンパス	静岡キャンパス																浜松キャンパス							
学部	人文社会科学部 [5]				教育学部				理学部				農学部				工学部				情報学部			
履修者数	29				75				27				20				80				14			
学年	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
履修者数	25	1	1	2	66	2	2	5	24	2	1	0	19	0	0	1	64	5	7	4	11	2	1	0

2.2 履修者の受験および受講行動

表 3 は両キャンパスにおける授業内試験とその受験および受講行動に関するデータを，授業内試験の受験人数とその履修者全員に占める割合，授業内試験の出題関連内容を扱う事前授業の受講人数とその履修者全員に占める割合，授業内試験の平均点に分けて示したものである。割合でみると，両キャンパスの学生の受験および受講行動のおおまかな傾向は似通ったものであることがわかる。また授業内試験（100 点満点）の平均点についても同様である。

表 3 授業内試験に関するデータ（2014 年度）

日程	授業内試験受験者				事前授業受講者				授業内試験平均得点	
	静岡		浜松		静岡		浜松		静岡	浜松
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合		
第 1 回	119	78.81%	73	77.66%	81	53.64%	52	55.32%	85.78	82.09
第 2 回	114	75.50%	67	71.28%	54	35.76%	38	40.43%	80.60	77.84
第 3 回	117	77.48%	66	70.21%	57	37.75%	31	32.98%	83.50	83.50
第 4 回	111	73.51%	61	64.89%	48	31.79%	27	28.72%	76.50	76.70
第 5 回	113	74.83%	59	62.77%	46	30.46%	33	35.11%	76.05	77.59
第 6 回	106	70.20%	59	62.77%	39	25.83%	28	29.79%	77.70	78.51
第 7 回	111	73.51%	58	61.70%	38	25.17%	27	28.72%	76.10	76.47
第 8 回	107	70.86%	52	55.32%	29	19.21%	25	26.60%	76.72	75.62
第 9 回	74	49.01%	42	44.68%	27	17.88%	9	9.57%	68.30	69.60
第 10 回	50	33.11%	31	32.98%	24	15.89%	7	7.45%	65.98	66.03

図 1 は，両キャンパスでの受講者数に占める授業内試験の受験者割合の推移を示したものである。静

岡キャンパスにおける授業内試験の受験率は初回の 78.81%から徐々に下降し, 最終的には 33.11%となり, 45.70 ポイント下降した。浜松キャンパスも同様に初回の 77.66%から最終的には 32.98%となり，44.68 ポイント下降した。

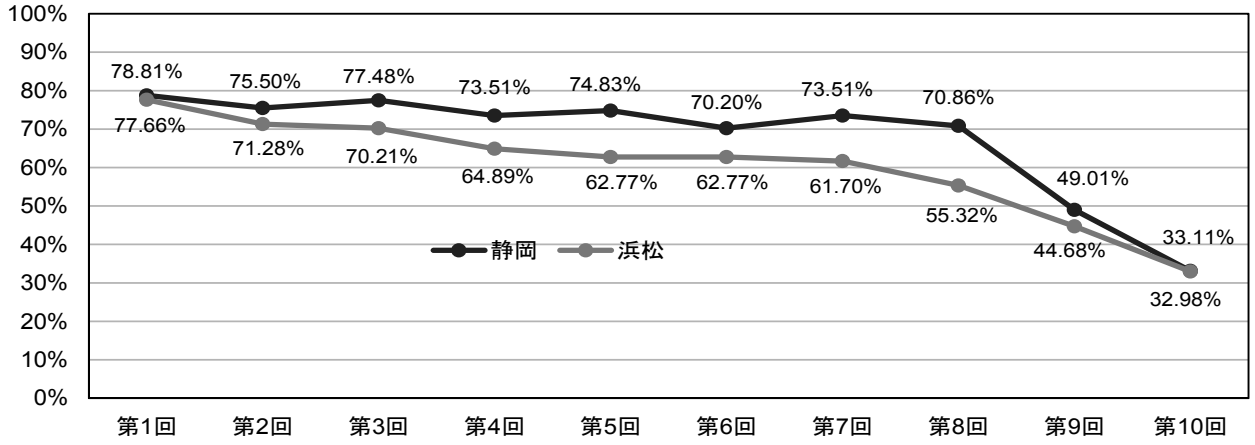

図 1 授業内試験受験者割合の推移（2014 年度）

図 2 は，両キャンパスでの受講者数に占める授業内試験関連授業の受講者割合の推移を示したものである。静岡キャンパスの受講率は 53.64%から徐々に下降し, 最後には 15.89%と 37.75 ポイント下降した。浜松キャンパスも同様に初回の 55.32%から 7.45%と 47.87 ポイント下降した。

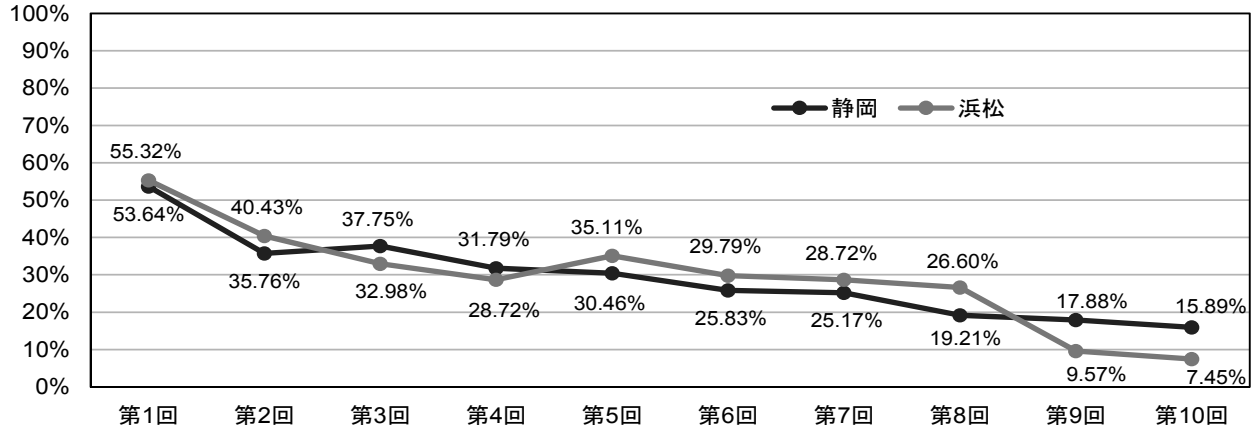

図 2 事前授業の受講者割合の推移（2014 年度）

図 3 は両キャンパスにおける授業内試験の平均点の推移を示したものである。両キャンパスの得点推移は非常に似通っている。最も差が大きいときでさえ，初回の 3.69 点差である（静岡キャンパス：85.78 点，浜松キャンパス 82.09 点）。授業の進行とともに徐々に平均点は低下しており，静岡の初回は 85.78 点であるが，最終回は 65.98 点と約 20 点下がった。浜松では，初回は 82.09 点であるが，最終回は 66.03 点と 16.06 点低下した。

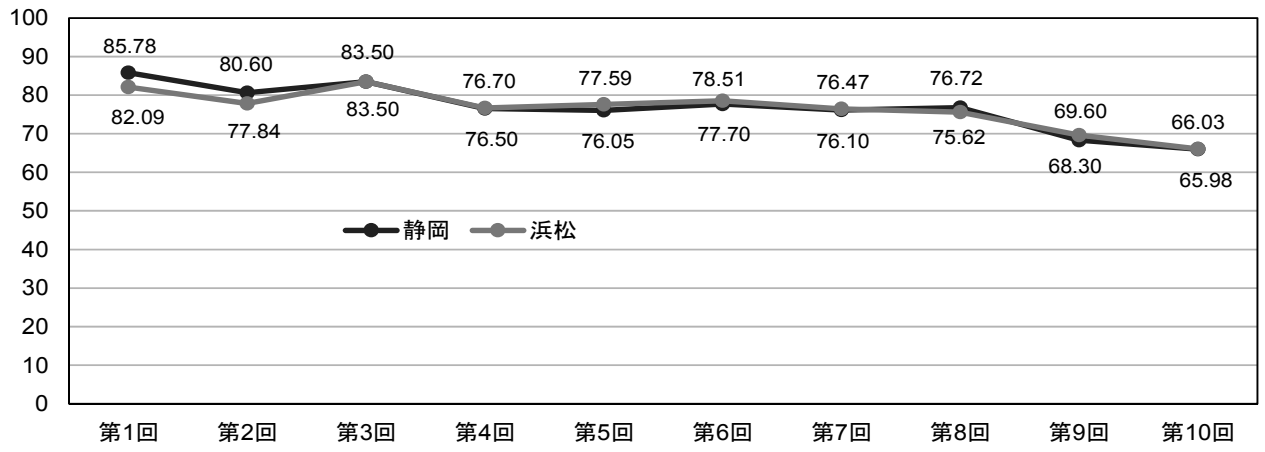

図 3 授業内試験平均点の推移（2014 年度）

2.3 単位修得の成否について

表 4 は，基礎英語演習において設定された基準をクリアし，単位修得に成功した学生とそうでない学生の人数と割合を示したものである。静岡キャンパスで単位修得に成功した履修者は 127 名（84.11%）であり，浜松キャンパスでは 72 名（76.60%）であった。

表 4 単位修得率（2014 年度）

キャンパス	履修者数	合格	不合格
静岡	151 100%	127 84.11%	24 15.89%
浜松	94 100%	72 76.60%	22 23.40%

第 1 章で詳述の通り，基礎英語演習には複数の単位修得条件があり，その組み合わせによって単位修得の成否が決まる。そこで 2014 年度に基礎英語演習を履修した学生が，どのように単位修得の基準をクリアした，あるいはしなかったのかを調べ，それを成功 3 種類，失敗 3 種類，併せて 6 種類に分類した。表 5 はその分類を示したものである。表中の「授業内試験」は，後学期の期間中に TOEIC を受験した結果，400 点以上を取得することはできなかったが，授業内試験の平均点が 60 点以上に達したために単位を修得することができた学生のことを指す。「TOEIC」は授業内試験の平均点が 60 点に到達しなかった，あるいは試験を 4 回以上欠席したが，TOEIC で 400 点以上を取得したことで単位を修得することができた学生のことを指す。「授業内+TOEIC」は授業内試験の平均点が 60 点以上であり，かつ TOEIC でも 400 点以上を取得することができ，単位修得に成功した学生のことを指す。ここまでの 3 種類が単位修得に成功した学生である。「TOEIC 受験なし」は，後学期の期間中に一度も TOEIC を受験しなかったために単位を修得できなかった学生のことを指す。「TOEIC 受験あり」は授業内試験の受験が 7 回に満たず，TOEIC を受験したものの 400 点以上を取得できなかったために単位を修得できなかった学生のことを指す。「どちらも受験あり」は授業内試験を 7 回以上受験したものの平均点が 60 点以上に到達せず，かつ TOEIC を受験したものの 400 点以上を取得できなかった学生である。

表 5 単位修得の成否の種類と分類（2014 年度）

種類	単位修得	静岡		浜松	
		人数	割合	人数	割合
授業内試験	Yes	78	51.66%	40	42.55%
TOEIC	Yes	26	17.22%	18	19.15%
授業内+TOEIC	Yes	23	15.23%	14	14.89%
TOEIC 受験なし	No	12	7.95%	13	13.83%
TOEIC 受験あり	No	7	4.64%	7	7.45%
どちらも受験あり	No	5	3.31%	2	2.13%
履修者合計		151	100%	94	100%

静岡キャンパスで授業内試験のみ基準に達して単位を修得したのは 78 名（51.66%），TOEIC のみ基準に達して単位を修得したのは 26 名（17.22%），授業内試験と TOEIC の両方で単位修得の基準に達して単位を修得したのは 23 名（15.23%）であった。同じく，浜松キャンパスでは，授業内試験のみ基準に達して単位を修得したのは 40 名（42.55%），TOEIC のみ基準に達して単位を修得したのは 18 名（19.15%），授業内試験と TOEIC の両方で単位修得の基準に達して単位を修得したのは 14 名（14.89%）であった。続いて，静岡キャンパスで単位修得に失敗した学生を見てみると，TOEIC を受験しなかったために単位を落としたのは 12 名（7.95%），TOEIC のみ規定通りに受験したが単位を落としたのは 7 名（4.64%），授業内試験から平常点を得るための最低基準である 7 回以上受験かつ TOEIC を受験したにも関わらず単位を落としたのは 5 名（3.31%）。浜松キャンパスでは，TOEIC を受験しなかったために単位を落としたのは 13 名（13.83%），TOEIC は受験したが単位を落としたのは 7 名（7.45%），授業内試験 7 回以上受験し，TOEIC も受験したが，単位を落としてしまったのは 2 名（2.13%）であった。

2.4 要改善点とその方策

2014 年度の大きな改善すべき点として，事前授業受講者の割合の大幅な下降が挙げられる。下降の理由として，基礎英語演習の履修者には，受講前の TOEIC スコアが 350 点を超える学生も多いことから，受講者の自主的な努力によって TOEIC 400 点以上を早期に取得したり，授業内試験での合計 600 点以上が早期に決定してしまうことなども含まれる。基礎英語演習では，そのような履修者が単位修得のために，ニーズに合わない授業や試験を受け続けなければならない状況は望ましくないと考え，事前授業への出席回数を単位修得の条件としない運営方針をとっていることから（髙瀬・松野・小町・小早川, 2016, pp. 113–114），ある程度の下降は想定されており，一概に下降を抑止すべきであるということはできない。

しかしながら，受講者の半数前後が TOEIC 400 点以上の取得を達成しないまま授業内試験の成績で単位修得を決めているという状況を考慮すると（表 5 参照），授業内試験での単位修得が早期に決まりすぎてしまうことで，本来は受講を継続すべき学生が自己を過大に評価し，リメディアルの段階を終了して標準的な学習経路に戻ることができるとの性急な判断を下してしまう可能性がある。それを防ぐためには，授業や試験，評価基準などの全体的なレベルを難化させるという選択肢もありうる。しかしながら，もし難化が行き過ぎれば，学習支援が必要な学生に対してリメディアル教育の機会を与えるという基礎英語演習の本来の目的にそぐわなくなってしまう。

そこで，2015 年度に向けた改善策として，授業全体で扱う英文法の学習内容は変えずに，扱う順番のみを逆転させることとした（表 6 参照）。難易度が高いと想定され，多くの学生の受講を求めたい英文法の学習内容はテキストの後半に配置されているが[6]，これまでは，その内容を扱う時期には単位修得が決まり，事前授業に出席しなくなる学生が多数に上ってしまうという需給の不一致が生じてしまっていた。順番を逆転させることによって，全体としての難易度を変えずに，高難度の内容を多くの学生に学んでもらうことができるようになり，かつ平均点の低い内容を先に扱うことで，単位修得の早すぎる決定を抑止することも可能になると考える。

表 6 基礎英語演習における英文法の学習スケジュール

テキスト	*Basic Grammar in Use (Third Edition)*			
時期	2014 年度後期		2015 年度後期	
第 1 回	Unit 10, 11, 12, 13, 14, 15	過去形，過去進行形，used to	Unit 102, 103, 104, 105	関係詞，前置詞
第 2 回	Unit 16, 17, 18, 19, 20, 21	現在完了	Unit 98, 99, 100, 101	接続詞，仮定法
第 3 回	Unit 30, 31, 32, 33, 34, 35	助動詞	Unit 86, 87, 88, 89, 90, 91	形容詞，副詞，比較級
第 4 回	Unit 45, 46, 47, 48, 49, 50	疑問文	Unit 81, 82, 83, 84, 85	数量詞
第 5 回	Unit 52, 53, 54, 55	動詞の原形，不定詞，動名詞	Unit 68, 69, 70, 71, 72	冠詞
第 6 回	Unit 68, 69, 70, 71, 72	冠詞	Unit 52, 53, 54, 55	動詞の原形，不定詞，動名詞
第 7 回	Unit 81, 82, 83, 84, 85	数量詞	Unit 45, 46, 47, 48, 49, 50	疑問文
第 8 回	Unit 86, 87, 88, 89, 90, 91	形容詞，副詞，比較級	Unit 30, 31, 32, 33, 34, 35	助動詞
第 9 回	Unit 98, 99, 100, 101	接続詞，仮定法	Unit 16, 17, 18, 19, 20, 21	現在完了
第 10 回	Unit 102, 103, 104, 105	関係詞，前置詞	Unit 10, 11, 12, 13, 14, 15	過去形，過去進行形，used to

*各回の Unit に対応する文法用語は説明の便宜のために付け加えたものである。

次章では，これらの改善策を講じて実践した 2015 年度後学期の基礎英語演習について 2014 年度後学期と同様の分析を行い，何らかの改善や変化が見られたかどうかを確認する。また履修学生の学習状況の更なる把握を目指し，毎回の授業内試験の際に，成績評価には無関係であることを明確に説明したうえで，その試験のために費やした直前 1 週間の総学習時間を，関連授業に出席した時間を除いて，以下の基準で回答するよう受験者全員に求めた。

① なし　② 30 分以下　③ 30 分から 1 時間　④ 1 時間から 1 時間 30 分　⑤ 1 時間 30 分以上

2015 年度後学期は，この学習時間の自己報告についても併せて，データを集計，分析し，その結果を報告する。

3. 2015 年度

3.1 所属学部別の履修者数

表 7 は静岡および浜松の両キャンパスにおける所属学部別の履修登録者数を示したものである。2015 年度の静岡キャンパスの履修登録者数は 129 名，浜松キャンパスは 62 名，両キャンパス合計 191 名であ

った。前年度と比べると両キャンパスとも履修者が数十名単位で減少している。学部別の傾向は昨年度と似通っているが，教育学部と理学部が増加，農学部と工学部が減少の傾向にある。学年別に見ると，やはり 1 年生の受講者が大半を占めており，静岡キャンパスの 129 名のうち 89.92%にあたる 116 名，浜松キャンパス 62 名のうち 82.26%にあたる 51 名が 1 年生であった。2015 年度の新入生は，静岡キャンパスでは 1219 名，浜松キャンパスでは 767 名であったため [7]，両キャンパスともに 1 年次後期の基礎英語演習を履修した新入生は 1 割を下回ったことがわかる。

表 7 両キャンパスにおける所属学部別の履修者数（2015 年度）

年度	2015 年度																							
キャンパス	静岡キャンパス												浜松キャンパス											
学部	人文社会科学部				教育学部				理学部				農学部				工学部				情報学部			
履修者数	21				67				32				9				51				11			
学年	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
履修者数	18	2	1	0	61	1	2	3	28	2	0	2	9	0	0	0	41	4	3	3	10	1	0	0

3.2 履修者の受験および受講行動

表 8 は授業内試験とその受験および受講行動に関する両キャンパスのデータを，授業内試験の受験者数とその全履修者に占める割合，授業内試験の出題関連内容を扱う事前授業の受講者数とその全履修者に占める割合，授業内試験の平均点の三つに分けて示したものである。割合でみると，第 9 回，第 10 回の受験者数のみ静岡キャンパスの方が 10%以上低いが，それ以外の点では両キャンパスの履修学生の受験および受講行動は似通ったものであることがわかる。

表 8 授業内試験に関するデータ（2015 年度）

日程	授業内試験受験者				事前授業受講者				授業内試験平均得点	
	静岡		浜松		静岡		浜松		静岡	浜松
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合		
第 1 回	84	65.12%	44	70.97%	58	44.96%	30	48.39%	73.23	72.43
第 2 回	78	60.47%	43	69.35%	46	35.66%	24	38.71%	70.37	71.63
第 3 回	86	66.67%	38	61.29%	48	37.21%	24	38.71%	79.28	72.34
第 4 回	81	62.79%	37	59.68%	45	34.88%	24	38.71%	77.16	73.62
第 5 回	79	61.24%	37	59.68%	40	31.01%	21	33.87%	76.18	75.46
第 6 回	78	60.47%	38	61.29%	34	26.36%	19	30.65%	80.38	75.79
第 7 回	78	60.47%	37	59.68%	37	28.68%	20	32.26%	77.92	75.70
第 8 回	73	56.59%	34	54.84%	33	25.58%	13	20.97%	83.62	82.50
第 9 回	61	47.29%	37	59.68%	26	20.16%	14	22.58%	79.18	72.78
第 10 回	44	34.11%	31	50.00%	17	13.18%	9	14.52%	78.75	76.00

図 4 は，2015 年度の両キャンパスでの授業内試験の受験者割合の推移を示したものである。前年度は

両キャンパスとも初回は 75%を超える受験率であったが，2015 年度はそれに比べると両キャンパスとも初回の受験率が低下している。その一方，最終回との受験率の差に着目すると，静岡キャンパスでは 31.01 ポイント，浜松キャンパスでは 20.97 ポイントの下降に留まっており，両キャンパスとも 45 ポイント前後下降していた前年度と比べると，下降の程度は緩やかなものとなった。

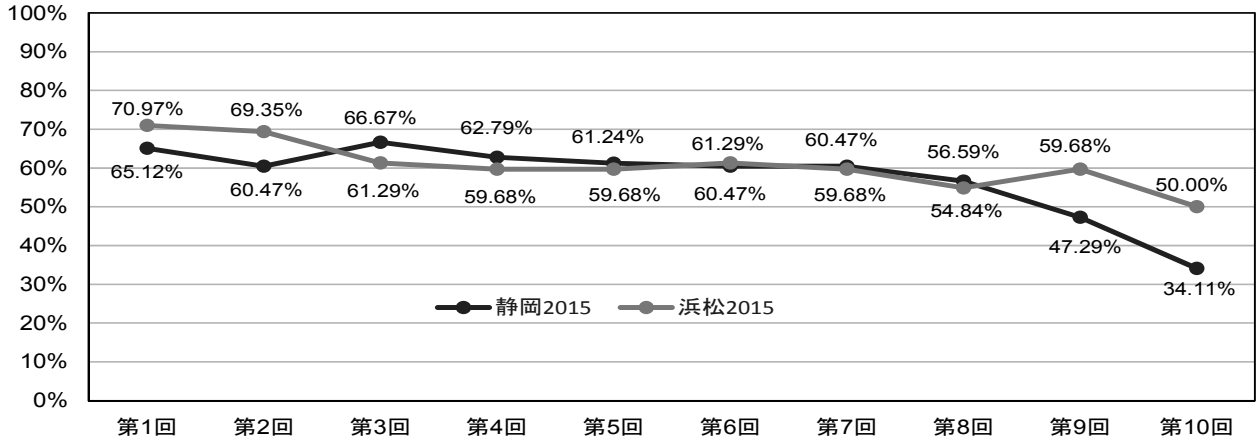

図 4 授業内試験受験者割合の推移（2015 年度）

図 5 は，授業内試験に関連する内容を扱う事前授業の，両キャンパスでの受講者割合の推移を示したものである。静岡キャンパスの受講率は 44.96%から徐々に下降し，最後には 13.18%と 31.78 ポイント，浜松キャンパスも同様に初回の 48.39%から 14.52%と 33.87 ポイント下降した。前年度の浜松キャンパスでは，第 9 回と第 10 回の受講率が 1 割を下回っていたが，2015 年度はそれほどの極端な下降とはならなかった。

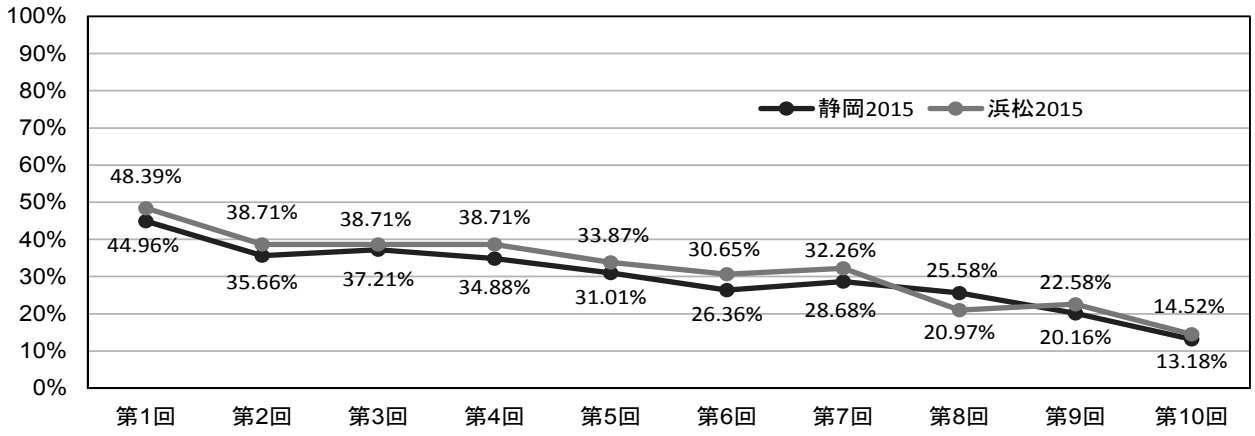

図 5 事前授業の受講者割合の推移（2015 年度）

図 6 は授業内試験平均点の推移をキャンパス別に示したものである。前年度同様，両キャンパスの得点推移は似通ったものとなっている。前年度との大きな違いは，第 2 章第 4 節で述べたように，難易度が高いと推測される学習項目から扱う順序に変更したため，授業が進行するにしたがって平均点の漸次

的な上昇が見られたことである。

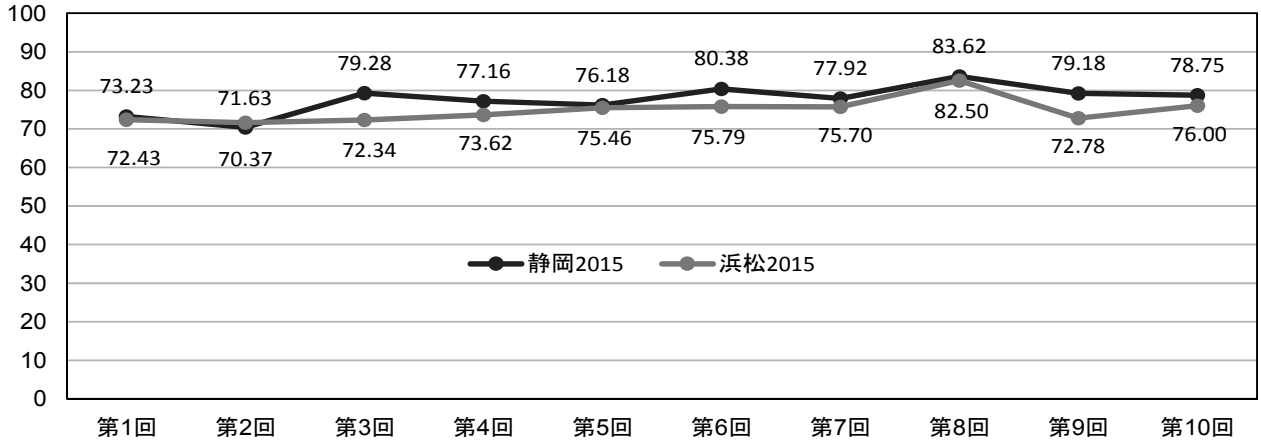

図 6 授業内試験平均点の推移（2015 年度）

3.3 単位修得の成否について

表 9 は，2015 年度の両キャンパスにおいて規定の基準をクリアし，単位を修得した学生と習得できなかった学生の人数と割合を示したものである。静岡キャンパスで単位を修得した履修者は 91 名（70.54%），浜松キャンパスでは 44 名（70.97%）であった。両キャンパスとも前年度に比べ，単位修得の成功率は低下しており，特に静岡キャンパスでは 84.11%から 70.54%と 13.57 ポイントの差が生じた。この理由については，次の単位修得の種類の分析と併せて考察することとする。

表 9 単位修得率（2015 年度）

キャンパス	履修者数	合格	不合格
静岡	129	91	38
	100%	70.54%	29.46%
浜松	62	44	18
	100%	70.97%	29.03%

表 10 は前年度と同じ基準で，単位修得の種類を分析し，6 種類に分類したものである。静岡キャンパスで単位修得した履修者 91 名のうち，授業内試験のみ基準に達して単位を修得したのは 68 名（52.71%），TOEIC のみ基準に達して単位を修得したのは 14 名（10.85%），授業内試験と TOEIC の両方で単位修得の基準に達して単位を修得したのは 9 名（6.98%）であった。同じく，浜松キャンパスで単位修得に成功した履修者 44 名のうち，授業内試験のみ基準に達して単位を修得したのは 22 名（35.48%），TOEIC のみ基準に達して単位を修得したのは 9 名（14.52%），授業内試験と TOEIC の両方で単位修得の基準に達して単位を修得したのは 13 名（20.97%）であった。続いて，単位を修得できなかった学生を見てみると，静岡キャンパスでは，TOEIC を受験しなかったために単位を修得できなかったのは 23 名（17.83%），TOEIC は規定通りに受験したが単位を修得できなかったのは 14 名（10.85%），授業内試験を 7 回以上受験かつ TOEIC 受験をしたにも関わらず単位を修得できなかったのは 1 名（0.78%）。浜松では，TOEIC を受験し

なかったために単位を修得できなかった 8 名（12.90%），TOEIC は受験したが修得できなかったのも 8 名（12.90%），授業内試験 7 回以上受験し，TOEIC も受験したが，修得できなかったのは 2 名（3.23%）であった。

表 10 単位修得の種類と分類（2015 年度）

種類	単位修得	静岡		浜松	
		人数	割合	人数	割合
授業内試験	Yes	68	52.71%	22	35.48%
TOEIC	Yes	14	10.85%	9	14.52%
授業内+TOEIC	Yes	9	6.98%	13	20.97%
TOEIC 受験なし	No	23	17.83%	8	12.90%
TOEIC 受験あり	No	14	10.85%	8	12.90%
どちらも受験あり	No	1	0.78%	2	3.23%
履修者合計		129	100%	62	100%

前年度と比較すると，静岡キャンパスで「TOEIC 受験なし」（2014 年度 7.95%，2015 年度 17.83%）と「TOEIC 受験あり」（2014 年度 4.64%，2015 年度 10.85%）の割合が高くなっていることがわかる。これはつまり，履修登録をしたものの授業内試験を受けず，授業にも出席しない学生が増えたということである。このような学生の増加が，単位修得率の低下につながったと考えられる。

3.4 学習時間の自己報告

表 11，表 12，図 6 および図 7 はそれぞれ静岡キャンパスと浜松キャンパスにおいて授業内試験のために学生が授業外で行った学習時間の自己報告をまとめたものである。あくまでも自己報告であることから，これがどこまで履修学生の授業外学習時間の実態を反映したものであるかは慎重に考える必要がある。しかしながら，それでもいくつかの示唆を得ることは可能であるように思われる。

まず，大変残念なことに授業外学習をまったくせずに試験に臨んでいる学生が，各キャンパスとも，およそ 2 割程度いるということがわかった。さらに，授業外学習をしている場合でも，その大半は 1 時間以下の学習にとどまっている。授業外学習を効果的なものとするためには学習の時間だけでなく，その質も重要であり，時間が長ければ長いほど習熟度の伸長につながるとは一概にはいえないが（Amano, 2014; Lai, Zhu, & Gong, 2015），それでもリメディアル教育を経て通常の学習経路への復帰を目指す学生にとって，1 時間以下という授業外学習時間は十分なものとはいえないだろう。

表 11 静岡キャンパスの受講生における授業外学習時間の自己報告

	回答数	第 1 回		第 2 回		第 3 回		第 4 回		第 5 回	
		83		76		95		71		68	
1	なし	11	13.25%	10	13.16%	11	11.58%	11	15.49%	16	23.53%
2	30 分以下	26	31.33%	25	32.89%	27	28.42%	24	33.80%	27	39.71%
3	30 分から 1 時間	25	30.12%	16	21.05%	23	24.21%	16	22.54%	13	19.12%
4	1 時間から 1 時間 30 分	14	16.87%	9	11.84%	27	28.42%	12	16.90%	6	8.82%
5	1 時間 30 分以上	7	8.43%	16	21.05%	7	7.37%	8	11.27%	6	8.82%
	回答数	第 6 回		第 7 回		第 8 回		第 9 回		第 10 回	
		69		68		66		54		44	
1	なし	18	26.09%	14	20.59%	16	24.24%	15	27.78%	18	40.91%
2	30 分以下	21	30.43%	21	30.88%	24	36.36%	20	37.04%	14	31.82%
3	30 分から 1 時間	11	15.94%	15	22.06%	15	22.73%	11	20.37%	5	11.36%
4	1 時間から 1 時間 30 分	9	13.04%	6	8.82%	5	7.58%	2	3.70%	2	4.55%
5	1 時間 30 分以上	10	14.49%	12	17.65%	6	9.09%	6	11.11%	5	11.36%

表 12 浜松キャンパスの受講生における授業外学習時間の自己報告

	回答数	第 1 回		第 2 回		第 3 回		第 4 回		第 5 回	
		43		43		38		37		36	
1	なし	9	20.93%	8	18.60%	6	15.79%	3	8.11%	5	13.89%
2	30 分以下	4	9.30%	6	13.95%	15	39.47%	11	29.73%	10	27.78%
3	30 分から 1 時間	20	46.51%	22	51.16%	9	23.68%	18	48.65%	15	41.67%
4	1 時間から 1 時間 30 分	4	9.30%	2	4.65%	6	15.79%	2	5.41%	3	8.33%
5	1 時間 30 分以上	6	13.95%	5	11.63%	2	5.26%	3	8.11%	3	8.33%
	回答数	第 6 回		第 7 回		第 8 回		第 9 回		第 10 回	
		38		37		33		36		30	
1	なし	6	15.79%	6	16.22%	6	18.18%	10	27.78%	9	30.00%
2	30 分以下	14	36.84%	8	21.62%	10	30.30%	9	25.00%	10	33.33%
3	30 分から 1 時間	14	36.84%	17	45.95%	12	36.36%	14	38.89%	5	16.67%
4	1 時間から 1 時間 30 分	3	7.89%	5	13.51%	3	9.09%	2	5.56%	4	13.33%
5	1 時間 30 分以上	1	2.63%	1	2.70%	2	6.06%	1	2.78%	2	6.67%

また，キャンパスごとに異なる傾向もみられる。静岡キャンパスでは授業外学習をしてはいても 30 分以下である学生が多いが，浜松キャンパスでは 30 分以上 1 時間未満が多い。その一方，1 時間以上の学習をしている学生は浜松キャンパスよりも静岡キャンパスの方に多い。しかしながら，なぜ同程度の英語習熟度を持つ学生たちが履修し，同じ教材を用いて足並みをそろえて授業を行っている両キャンパスにおいて，このような学習時間の差が見られたのかは現在のところ不明であり，今後の調査課題となる。

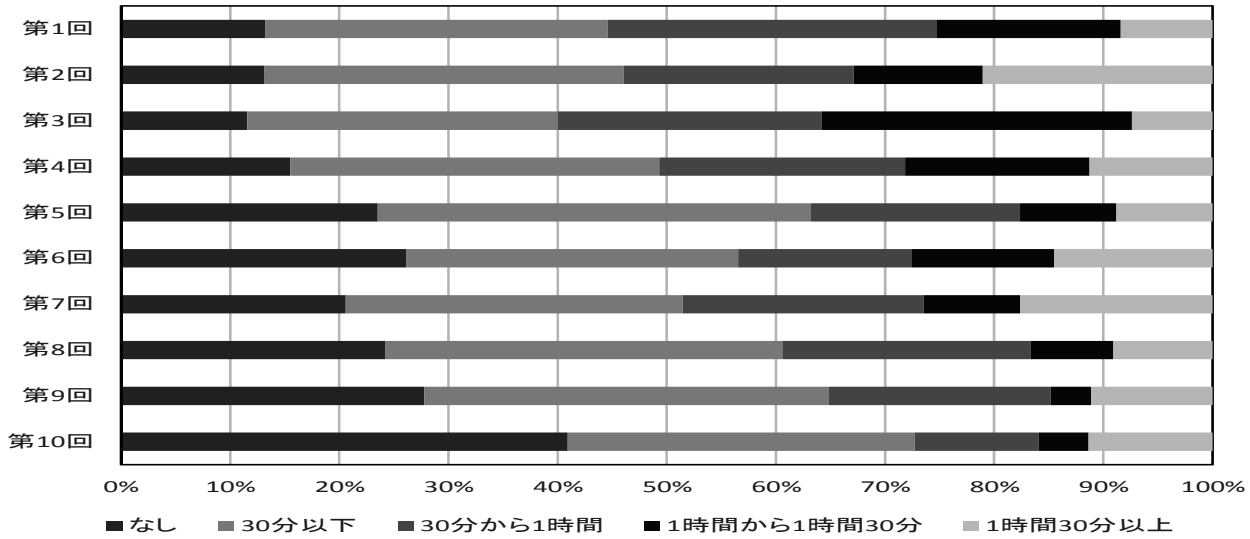

図 6 静岡キャンパスの受講生における授業外学習時間の割合

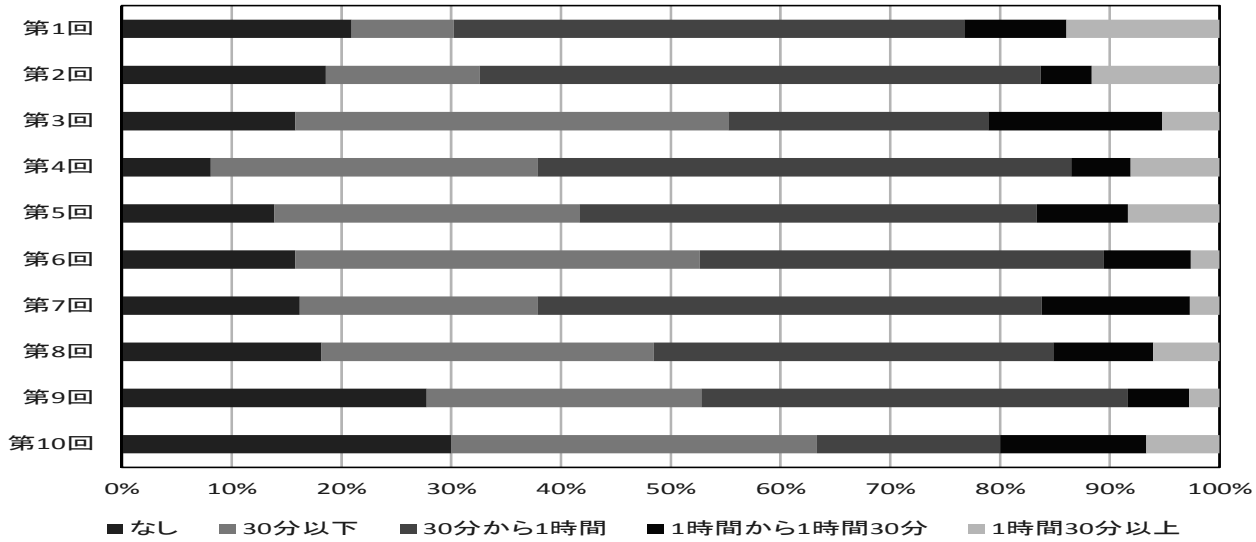

図 7 浜松キャンパスの受講生における授業外学習時間の割合

3.5 要改善点とその方策

2015 年度の学習行動の大きな特徴の一つは，前年度に比べ，授業内試験の受験率と事前授業への出席率の下降が大幅に緩和されたことである。これは，学習スケジュールを変更し，授業での英文法の学習順序を逆転させ，難易度が高いと思われるものから扱ったことが奏功したものと推察される。

しかしながら，それでもまだここには改善の余地があるように思われる。特に，授業外での学習時間が十分とはいえない状況が明らかになったことを踏まえると，授業内試験の受験率と事前授業への出席率の差はさらに是正されるべきであると考える。そのためには，基礎英語演習の授業全体の難易度の見直しを再度検討すべきかもしれない。第 2 章第 4 節で述べたように，2015 年度の授業開始前にも難易度の上方への見直しは検討された。しかし，もし難化が行き過ぎれば，基礎英語演習の本来の目的から逸れてしまうのではないかという懸念から，難易度の変更を見送り，学習する順序の変更という方策によ

って問題に対処することを試みた。2014 年度と 2015 年度のデータの比較から，この方策には一定の成果があったと考えられる。それでもなお，受験率と受講率の隔たりは小さくない。例えば，第 5 回試験を見てみると，静岡キャンパスでは受験率が 61.24%，受講率が 31.01%，浜松キャンパスでは，受験率が 59.68%，受講率が 33.87%とおよそ 30 ポイントの差がある。もし，事前授業に出席していなくとも，学生が授業以外の場で十分に学習したうえで試験に臨んでいるのであれば，この差は大きな問題ではないかもしれないが，授業外学習時間の調査結果を見る限り，そのような想定は成り立たないようである。

授業全体の難易度の上方修正を検討すべき理由はもう一つある。それは，表 13 に示すように，英語演習 I を受講者のうち, 合格基準である TOEIC400 点以上取得者の割合が年を経るごとに徐々に上昇していることである [8]。2015 年度には初めて 9 割を超える結果となった。このように在学生全体の習熟度が上昇傾向にある中で，基礎英語演習は従来通りの難度を維持するということになると，基礎英語演習の単位を修得しても，静岡大学の学生としての標準的な学習経路に戻れるだけの習熟度に到達することができず，カリキュラム全体のバランスが損なわれてしまうのではないかと懸念される。したがって，やはり授業全体の難易度の上方への見直しについて再度検討することは必要だと考える。

表 13 英語演習 I 受講後における TOEIC400 点以上取得者数の年次推移

年度		2013	2014	2015	2016
データ数		1913	1939	1939	1941
400 点以上	人数	1659	1723	1780	1807
	割合	86.72%	88.86%	91.80%	93.10%

2015 年度のデータ分析から見出されたもう一つの課題は，履修登録をしただけで，授業に出席せず試験も受けず TOEIC の申し込みもしていない学生への対応である。このような問題は，どのような仕組みを作ってもある程度は起こりうるものであり，英語リメディアル教育の改善そのものとの直接的な関係は薄いかもしれない。しかし，基礎英語演習の単位修得は卒業要件でもあることから，各キャンパスの教務係や指導教員と連携し，多角的な対応を継続していくことは重要である。具体的には，履修登録期間に受講対象者向けに履修案内のメールを送付し，掲示物で注意喚起をするというような対応を今後も継続して実施していく。

4. まとめ

本報告では, 2014 年度および 2015 年度の後学期における基礎英語演習の履修学生の学習行動を分析し，それぞれの課題とその改善案をまとめた。2014 年度の主要な課題は，授業内試験の出題関連内容を扱う事前授業受講者の割合が，授業の進行とともに大きく下降したことであった。その対策として，2015 年度は授業の順序を難易度の高いものから低いものへと変更した。その結果，2015 年度は前年度に比べ，下降の程度を大幅に緩和することに成功した。今後は，出席者数の更なる増加に向けた対策を検討していきたい。

参考文献

Amano, S. (2014). Variations in time and differences by learner type in out-of-class language learning time for EFL

listening courses. *LET Journal of Central Japan, 25*, 85–96.
小町将之・小早川真由美・髙瀬祐子・松野和子 (2014). 「静岡大学の教養教育における英語教育システム改善の試み」 『静岡大学教育研究』 10, 55–66.
Lai, C., Zhu, W., & Gong, G. (2015). Understanding the quality of out-of-class English learning. *TESOL Quarterly, 49*, 278–308.
髙瀬祐子・松野和子・小町将之・小早川真由美 (2016). 「リメディアル英語教育における組織的改善」『静岡大学教育研究』 12, 109–123.
厨子光政・髙瀬祐子・松野和子 (2015). 「平成 25 年度全学英語カリキュラムにおける調査報告：TOEIC スコアと選択科目の受講動向を中心に」 『静岡大学教育研究』 11, 89–100.

注釈

1) カリキュラム改革の詳細やその成果および基礎英語演習との関係が深い英語演習 I についての詳細は，小町・小早川・髙瀬・松野（2014）および厨子・髙瀬・松野（2015）を参照。
2) 団体特別受験制度（TOEIC IP テスト）での受験によるスコアを含む。
3) 本報告は，1）各キャンパスにおける学部ごとの履修者数，2）全 10 回実施された授業内試験の受験者数，3）各授業内試験に対応する事前授業への出席者数，4）授業内試験の平均点，5）単位修得の成否とその種類，という五つの観点から履修者の学習行動の特徴を分析することを主眼とするため，TOEIC スコアは分析に含めないこととした。
4) 2014 年度版の『静岡大学概要』に基づいて算出した。なお，人文社会学部夜間主コースの学生数は，カリキュラムが異なるため，含まない。
5) 正確には，人文社会学部ではなく人文学部の 4 年生 2 名を含む。
6) このことは，授業内試験の前半 5 回と後半 5 回の平均点に 5 点以上の差があることからもわかる（第 1 回から第 5 回 79.96 点，第 6 回から第 10 回 74.25 点）。
7) 2015 年度版の『静岡大学概要』に基づいて算出した。なお，人文社会学部夜間主コースの学生数は，カリキュラムが異なるため，含まない。
8) 表 13 に示すデータは，各年度 4 月の英語演習 I の開講から前学期末の TOEIC IP テストまでの期間に TOEIC 400 点以上を取得した学生の数を示すものであり，TOEIC スコアが高得点でも欠席過多や期末試験の未受験で不合格となる学生もまれに存在するため，厳密には英語演習 I の合格者数とは異なる。